大会長講演

ー我逢人　道はつながる　その先へー

第13回東北放射線医療技術学術大会 大会長　佐藤 晴美
山形県立中央病院

新型感染症が蔓延したこの3年間、私たちは多くのことを制限されました。人と逢うこと、語らうこと、当たり前の日々を失いました。このような事態が起こりえることは、大変な衝撃でした。

2023年5月に感染症が5類に移行して、やっと以前のように戻れたかというと中々そうはいきません。

人に逢うことがはばかられた3年間に、いろいろな通信ツールが発達しましたが、みなさん、どうでしょう。

Web 配信で物足りなさを感じている方が多かったと思います。

“我逢人”　我、人とあうなり。

「自分だけで考えて、自分だけで行動していたのでは見つからないことがある。

だから、その、人との出会いこそが全ての始まり」であり、制限が解かれたこの大会から、皆さんがつながってあらたな道が見えてくることを期待したものです。

さて、私のことをお話したいと思います。

私は、1983年に診療放射線技師免許を取得しました。この時、女性は、特に民間病院では就職の募集要項すらもらえなかったのです。夜勤業務、緊急業務ができないからです。

1985年に【男女雇用機会均等法】が制定され、女性も病院においては夜勤業務もできるようになり、やっと民間施設でも採用してもらえるようになりました。しかし、このころは、育児休業がありましたが、教員、看護師の職種のみでした。したがって、妊娠出産で仕事を辞めざるおえない女性技師が全国にいました。

このことが、さらに女性技師が働きにくい社会に悪循環していたと思っています。

そのような時が長く、30年が過ぎ、2015年に【女性活躍推進法】が施行されました。

世の中には戸籍上、女性、男性だけであるのに、女性が活躍していないと思われたのでしょうか？

当事者の私達には、不思議でたまりません。社会が、女性が妊娠出産のあとに、社会に戻ってこれない損失に、やっと気がついたのだと受け取っています。

そこから、2016年【ダイバーシティ検討会発足】、2017年【働き方改革を推進するための関係法律】の整備、2022年10月【出生時育児休業（産後パパ育休）】などがつづきます。

・Diversity & Inclusion　近年、多様性と受容という言葉がよくつかわれています。

その説明として、「人種や性別、年齢などの外見的な違い、宗教や価値観、性格、嗜好など、内面にもさまざまな違いがある」ということ。そして、「ダイバーシティ＆インクルージョン（Diversity & Inclusion）」個々の「違い」を受け入れ、認め合い、生かしていくこと。企業においてインクルージョン（受容）とは、「お互いを認め合いながら一体化を目指していく、組織のあり方」と理解されています。

厚労省では、「女性活躍推進法の改正と認定制度」働くことを希望する女性が活躍できる社会づくりを進めることを重要とし、経済産業省においては、「女性を含む多様な人材確保」を進めようとしています。

・Diversity　多様性の理解はどうでしょう。まだまだ、女性活躍の延長だと思い違いをしている方が多いのです。皆さんの職場・家庭で、女性は活躍していませんか? 女性、男性のくくりを外し個として見たらどうでしょうか?

そして、妊娠出産は女性の特権ですが、どう頑張っても男性に代わることはできません。

その時に、「出産とキャリアはトレードオフなのか」という現実がないでしょうか? この構造がうまく消化できていないのではないでしょうか? 育児と違って出産はどうしても女性にしわ寄せがきます。だからこそ「トレードオフ」になるのはおかしいのです。性別・年齢を問わず、負荷を意識しながら多くの人に公正になる形で、当事者意識をもって家庭環境、職場環境を構築する必要があるのです。

女性のみならず、多くのマイノリティがともに働く上でも重要なことです。

さて今回、特別講演に東京大学名誉教授の上野千鶴子先生にお話しいただきます。演題名は「医療とジェンダー：メディカル、コメディカルの連

携の中で」としてご講演いただきます。
　上野先生とのご縁は、どこにもなくて以前よりメディアで、先生のお話が取り上げられていたことから、いつか先生のお話をお聞きしたいと思い、ダメもとで事務所に問い合わせしたところ、お引き受けいただいたものです。

　上野千鶴子先生は社会学者であり東京大学名誉教授。女性学、ジェンダー研究パイオニアです。
　2019年東大の祝辞で（不正入試があり性差別があった時）「頑張ったら報われると思えるのは、努力の成果ではなく、環境のおかげだったことを忘れないで。恵まれた環境と能力を自分が勝ち抜くためではなく、恵まれない人々を貶めるためではなく、助けるために使って欲しい」これがメディアでの情報の初めでした。

　頑張ったら報われるということは当たり前、でなければなりません。
　しかし、頑張りを認めない社会が現実にあったからこそ、この祝辞なのです。
　ですが、そのゆがんだ当たり前を乗越えた人たちがいました。
　だからこそ、今のあなた達がある。
　そのことを感じ、理解して、次に何を伝えられるかを考え行動してほしいのです。
　みなさまに今大会で、多くのことを感じて持ち帰っていただきたいと思います。

我逢人　我、人と逢うなり

人と逢うことを大切に。
人に逢える場を大切に。
人と逢う姿を大切に。

道はつながる　その先へ